ARTKISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行 http://www.camk.or.jp [2006.学芸員実習生特別号] vol.29

子供芸術大学特別講座「アートキャンプ」 2006.7.29-30 in 金峰山少年自然の家

今年で3回目となる子供芸術大学特別講座「アートキャンプ」が金峰山少年自然の家で行われました。今回のメンバーは小学1年生～5年生の子どもたち11人と、当館の学芸員実習生13人、美術館スタッフ3人の総勢27名でした。このアートキャンプは、子どもたちが親元を離れ自然の中で過ごすことで、自分と向き合い五感を研ぎ澄まし、芸術に親しむ心を養うことを目的として行っています。一泊二日の内容は、一日目にウォークラリーと野外炊飯、そしてナイトハイクに花火、二日目には金メダルならぬ木メダル工作となっていました。内容盛りだくさんのプログラムだったのですが、ぬけるような青空の下、子供たちは学芸員実習生のお兄さん、お姉さんと一緒に汗をかきかき、自然の中での生活を楽しんでいました。最後には「来年もまた来たいっ！」という子どもたちの笑顔でしめくくることのできた、本当に楽しい一泊二日のアートキャンプでした。(S.Y)

Museum information

森村泰昌さん来熊　2006.7.16－17

美術家の森村泰昌さんが、来年4月よりスタートする個展の準備のため、CAMKにいらっしゃいました。修学旅行ぶりの来熊という森村さんは、展示室の様子や開催中の生人形展をじっくりとご覧になり、当日開催されていた生人形展トークショーでは、開始前に、世界初公開の三島由紀夫をテーマにした新作映像のサプライズ上映もしていただきました。その迫力にはお客様もびっくり。来年の個展が今からとても楽しみです！！(森村泰昌展は2007.4.7－7.8に開催予定)（A.S）

山口昌男「江戸の欲望と想像力」ビデオレクチャー　2006.7.9

文化人類学者の山口昌男さんの講演会は、事前に行ったインタビューによるビデオレクチャーとして開催されました。今回出品の安本亀八の野見宿禰と当麻蹴速の取り組みの相撲像のように、生と死、勝者と敗者、プラスのものとマイナスのもの、それらは対極というよりも、むしろそれぞれを豊かにするエネルギーを秘めたものであるなど、多岐にわたってお話くださいました。
来場者の方々からは、山口氏の幅広い知識とさまざまな事象をつないでいく柔軟な見解が、映像を通して充分に伝わってきたとの感想をいただきました。(Y.H)

生人形展トークショー「キャラクター文化と生人形」　2006.7.17

伊藤剛さん(漫画研究家)、宮本大人さん(北九州市立大学助教授)のトークが金澤韻さん(川崎市市民ミュージアム学芸員)の司会により開催されました。当日はゆかた祭ということもあって、3人にも粋な浴衣姿で登場していただきました。生人形とフィギュアは似ているという流れから始まり、そこから、質感・リアリティを追求する生人形と、個(キャラ)を重要視するキャラクターとを対比させることで違いを導きだすなど、多角的な話で聴衆の理解を深めていました。浴衣の涼しげな雰囲気とは対照的に、伊藤さんと宮本さんのキャラクター論が飛び交う、熱いトークとなりました。(A.T)

GⅢvol.40　真珠子　Ready for Lady展

■真珠子展スタート

天草出身で、イラストレーションや映像の分野で活躍する真珠子（しんじゅこ）の展覧会がはじまりました。会場には初公開の新作映像《さくら&んぼ》のほか、原画や、作家本人によるイラストが施された様々なオブジェによるインスタレーションが迎えてくれます。会期は10月1日(日)まで。お見逃しなく！（A.S）

■トーク&ワークショップ

8月5日アーティスト・トーク&ワークショップが開かれました。トークでは作品制作の過程を説明。線が好きで、その感覚を大切にしていること、また子供の頃のことや心に残ったものなど、記憶の断片をつなぎあわせて作品を作っているというお話は、たいへん興味深いものでした。「人生コラージュ」と題されたワークショップでは、参加者が古雑誌などから切り抜いたさまざまな画像をコラージュしました。できあがってきた作品からは参加者それぞれの個性や歩んできた人生が読み取れ、感動的でした。この場にいたすべての人の心に残るワークショップになったのではないでしょうか。(展覧会企画：金澤韻)

＊カタログ（600円）好評発売中!!

モクモク工房　7.13／8.4「ドレッシング入れ」

毎月第2木曜に開催するモクモク工房。7月－8月は「ドレッシング入れ」をつくりました。ドレッシング入れは初挑戦のカラー粘土を使って、小さなパーツで絵を描くように貼り付けていきます。釉薬などとは違って、やり直しやすく、十分にかたちを吟味できるのが魅力のひとつ。皆さんいつも以上に集中して取り組まれていました。（A.S）

※モクモク工房では参加者を募集しています。毎月第２木曜の14:00－17:00。参加費は1回1500円。今後の制作予定は、「大皿」「花器」「自由制作」です。お問い合わせ、お申し込みは現代美術館096-278-7500まで。

人形劇公演「アレクサンダとぜんまいねずみ」　2006.7.2

「生人形と江戸の欲望展」会期中には、熊本県内外で活躍中の人形劇団に公演をしていただきます。その第1弾となるのが、人形劇団チャバによる「アレクサンダとぜんまいねずみ」。こねずみアレクサンダのゆかいな仕草やおどろおどろしい森のシーンなど色彩豊かな舞台には目を瞠(みは)りました。終了後は人形と握手をしてご機嫌の子どもたちの姿が印象的でした。(E.Z)

＊10月14日には「田舎のねずみと都会のねずみ」(人形芝居かすべる)が開催されます。アートロフト、14:00から、入場無料

生人形鑑賞会、浄国寺・来迎院

○浄国寺編　2006.7.16　　○来迎院編　2006.7.22

松本喜三郎《谷汲観音像》が安置されている、熊本市高平の浄国寺で鑑賞会が行われました。ご住職からお寺や谷汲観音の由来などをお話いただいた後、許可を得て非常に間近で観音様を拝見させていただきました。《谷汲観音像》は、8月末から修復に入り、その美しい姿を再び私たちの前に見せてくれるそうです。(A.S)

熊本の春日にある来迎院に訪問し、松本喜三郎の晩年の名作《聖観世音菩薩像》を観賞しました。小川修海住職より、このお像の由来などのおはなしをいただき、参加者の皆さんは、その後じっくりと《聖観世音菩薩像》を見入られていました。住職のあたたかいお心遣いにより、今回の参加者の方々へ《聖観世音菩薩像》の写真が１枚ずつ御土産としてご用意されてありました。激しく雨のふる日々のなかでの開催でしたが、観賞会の時間帯だけ雨が上がってほっとしました。「前回そして今回の生人形展の開催により、県内・県外から、《聖観世音菩薩像》を拝観に、来迎院を訪問される方がだんだんと増えてきております、後世にこのお像をきちんとお伝えするのが私の使命と思っております」との住職のお話でした。(H.T)

CAMKレクチャー・カレッジ「生人形の構造」　2006.7.23

当館学芸員の冨澤治子が、「生人形の構造」についてレクチャーを行いました。このレクチャーは生人形師が作品の表面にあらわれないところで行った工夫、匠の技に注目するものでした。着衣の生人形の特徴のひとつとしての「提灯胴」など熊本に残る松本喜三郎の作品を通して紹介しました。また、裸像で展示される作品に対して行われる工夫として、木材でつくられる本体の内側を空っぽに削り落としてしまう胴体の「内刳(うちぐり)」の部分などを紹介しました。これらの部分は、作品を組み立てるときにしか見ることのできないもので、初公開でした。また、13パーツからなる安本亀八《相撲生人形》の、展示の際の組み立て風景なども写真で紹介しました。

第2回城下町くまもとゆかた祭に参加しました　2006.7.15－17

7月15日・16日、熊本市の中心商店街一帯で開催された「第２回城下町くまもと　ゆかた祭」に、熊本市現代美術館が初めて参加しました。「城下町にはゆかたが似合う」とのキャッチコピーで昨年から始まったこの祭、暑い熊本の夏を涼しくおしゃれなゆかた姿で楽しもうと、たくさんの人で街は大いににぎわいました。期間中は上通、下通、サンロード新市街で150以上の店舗がゆかたを着て来店した方に、プレゼントや飲み物サービスの特典を用意しました。美術館でも、ゆかた姿で来た方には「生人形展」の入場料を半額とし、オリジナル絵ハガキがプレゼントされました。また、15・16日に加え17日の3日間は、美術館内の受付や監視員、スタッフもゆかたを着用。いつもと違う華やかな雰囲気に、来館者の一人は「美術館でゆかた姿を見られるなんて、新鮮な感じでいいですね。生人形展にぴったりのイメージです。」とにこやかに語ってくれました。(事務局次長：山田千明)

SUITOTTO Kumamoto

【スイトット・クマモト】

本年度のスイトット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。(インタビュアー・構成:鍵座江美)

＊いける＝花を生かす、ことと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【花山院流編】

常設のいけばなギャラリーに本渡からわざわざ花を生けに来てくださった田中熟岳先生をつかまえてのインタビュー。貴重な系図などの資料を見せていただきながらお話をうかがった。どの流派でも課題とされている後継者不足に話題が移った際には、「技術一点で生けている花山院流にはなかなか若い人が入ってくれませんね」と苦笑いされていたが、「技術一点」という言葉に花山院流の伝統と誇りを感じた。20歳のときに父親に勧められて始めたお花は、2年ぐらい経ってからぜんぜんうまくならず悩んだという。「先生のように生けたいとずっと思っていましたね」。その向上心が技術を磨くのだろう。「花を切るのは痛いだろうなと思いながら、いただきますという感謝の気持ちを持って切ります。もとあった姿よりもよく見せてあげようという気持ちがいつもありますね」という花に対する姿勢が、生け込みをされているときの花の扱い方に現れていると思った。いけばなを通して、なごみ、和を伝えたいとおっしゃる先生は、強く太い幹から優しく枝をしならせて花を咲かせるしだれ桜のようだと思った。

熊本の華人展vol.2生け込み風景

熊本の華人展vol.2大作作品

【熊本未生会編】

お話をお伺いしたのは、笑顔がチャーミングな秋吉淳甫先生。「後継者不足が課題です」とおっしゃる先生に、なにか対応策を考えていらっしゃるのかお聞きしたところ、「家元は学校に入りなさい(生徒たちにいけばなを知ってもらうために)とおっしゃいますが、今の子どもたちは部活や塾が忙しくて本当に時間がないんですよね」とひとこと。生涯学習講座でお花を指導しているが、若い方はほとんどいないという。毎回インタビューをしていて思うが、後継者不足はどの流派でも避けられない大きな課題だと思った。いけばなはいきがいだとおっしゃる先生だが、忙しくてまだまだその楽しみをゆっくり味わう時間がないとのこと。楽しく生けることがモットーの先生がいけばなを通して伝えたいことは、人の和だという。「これまでたくさんの人といけばなを通して知り合うことができて、とても幸せだと思う」と、にこやかに語られる先生のお好きな花は水仙と杜若とのことだが、そのやわらかい笑顔にはスイトピーがぴったりだと思った。

アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせる新コーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

○第2回／ミロヴァン・マルコヴィッチさん　Milovan Markovic(fromドイツ)　1957年ベオグラード生まれ。ベオグラード大学美術アカデミー絵画科修了。
ベルリンで活躍するミロヴァンさんが、所蔵作品をみるためのたくさんのヒントをお話してくれました。

Q.1 ミロヴァンさんが、興味をもって作品に表現していることは何ですか？

熊本市現代美術館の「ATTITUDE2002」展に出品したのですが、そのカタログを参考にしてください。「美術の歴史において、目に見えるものを媒体として、世界の真実を語る実践が続けられ、またその画面から本質的なものを読み取ろうとする観賞の姿勢が培われてきた。マルコヴィッチの作品を前にすると、一つの状況に直接結びついた映像や具体的な姿が避けられているために、絵画に向かうこの真摯な態度が呼び起こされ、イメージの奥にあるものへと関心が向かうのである。これは視覚化されたものへの無防備な信頼を寄せ、真実を問う時間が与えられない現代メディア社会への警告ともいえよう。」(本田代志子「語り継がれる肖像画」より引用、「ATTITUDE2002」展覧会カタログ、熊本市現代美術館、2002年)

Q.2 《Transfiguratives》シリーズについてお聞かせ下さい。

《Transfiguratives》の作品群は、通常のヴィジュアルによる表現の限界に挑戦するものであり、それと同時に、ヴィジュアルによる表現の可能性について調査するものです。このシリーズは、その根本として「クローズアップ」の役割に関係しています。「クローズアップ」とは、人間の顔の、可視的な産物と不可視的な産物によって生ずるその表情のなかの、その優劣の関係を注目し描写する傾向があります。人間の顔に現われるこれらの産物は両方とも、社会的に調整されたり、演出されたりします。しかしこれらの産物は、「理想的な顔」というものがイデオロギー的なプロパガンダもしくは市場目的を満たすために使用されるかもしれない公共の場のなかからは生み出されません。私は「transfigurative」という言葉を、1990年代半ばから制作し始めた作品群のテーマとして応用しています。これらは3つのシリーズ、《Lipstick Portraits》シリーズ、《Selfshaves》シリーズ、《Text Portraits》シリーズから構成されています。すべての作品において、私は人間の顔に焦点をあてています。慣習的な肖像画が、形象描写の手段に拠るのに対し、私の作品は、再現的なものでもアイコンのようなものでもありません。しかしながら、私の作品はすべて実在の男性や女性を描いた絵画であり、そういう意味でこれらの肖像画は形象描写以外のなにものでもないわけです。つまり、単に見た目が似ているということを超えている点で、抽象ではなくむしろ「trans-figurative(別の状態の－形象描写)」なのです。最初のシリーズ、《Lipstick Portraits》シリーズは、世界で最も高名と思われる女性の肖像を描きました。彼女達の顔が私たちにとって親しみ深いものであるのは、(印刷媒体、テレビ、インターネットなどで)大量に複製されたメディアを通じて何千回も再生産されているからです。《Lipstick Portraits》シリーズのそれぞれは、ベルベットの表面に口紅を塗りこんでいます。口紅を画材として使用したのは、顔をメイクし、更新していくために女性の日々の化粧に常用されているからです。化粧とは女性の自画像なのです。このシリーズは、名誉あるセレブリティーである彼女たちを扱うことで、彼女達の尊敬されるべき専門性やキャリアを公共的に可視的なものにしています。

最近展開しているシリーズは、《Text Portraits》というもので、無職の人々やホームレスや公共的な不可視性を、全く別のやり方で明らかにするものです。女性の肖像画(《Lipstick Portraits》のこと：訳者補足)のように、形象描写がされていない作品を見るとき、我々は記憶にあるイメージを頼りにして、メディアから知りえる女性たちの「本当の」顔をなんとかして思い出そうとしますが、それとは対照的です。ホームレスの男性達の肖像画においては、我々にとっては無名の個人を描いた絵画を目の当たりにすることになります。彼らは不可視的なものとされる傾向にあるグループに属して生活しています。《Text Portraits》は、世界各国の首都に住むホームレスの人々へのインタビューをもとにして制作しています。作品には、彼らの自伝のテキストを通じて、人間としてのアイデンティティーが表現されます。実在の人物が、カンバスに絵の具で描かれた自伝のテキストを通して、別の状態の形象描写(transfigured)として表現されるのです。これらの肖像画は、ホームレスの人々の存在が当然のことながら社会的に見えるようにするために、公共の場で発表しています。

Q.3 今後予定されている展覧会などご紹介下さい。

今年の4－6月には、「Homeless Berlin」という展覧会を開催しました(Galerie Kai Hilgemann)。また、《Transfigurative》シリーズを取り上げた新刊のカタログが11月末までに準備される予定です。カタログには、《Lipstick Portrait》と《Text Portrait》との違いや、リアルなイメージとは何であるかなどのディベートが掲載される予定です。(翻訳：H.T)

❶

❷

❸

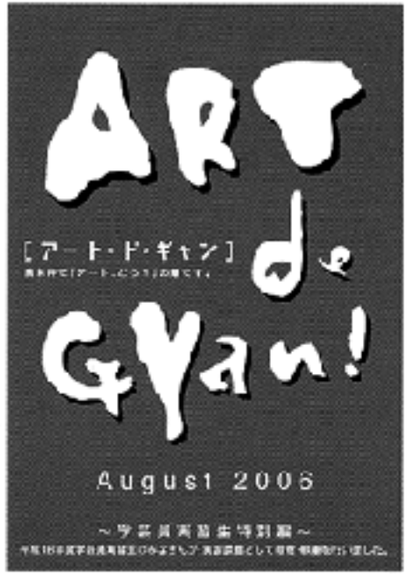
❹

❺

❻

❶ 《Transfiguratives: Portrait of Julia Kristeva》, 1995年, 122x87cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵
❷ 《Transfiguratives: Portrait of Hillary Clinton》, 1996年, 122x86cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵
❸ 《Transfiguratives: Portrait of Vivenne Westwood》, 1996年, 122x88cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵
❹ 《Transfiguratives: Portrait of Jessye Norman》, 1996年, 122x89cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵
❺ 《Transfiguratives: Portrait of Gal Costa》, 1996年, 122x90cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵
❻ 《Transfiguratives: Portrait of Dawn Aung San Suu Kyi》, 1996年, 122x91cm, ベルベット地に口紅、額縁、真鍮のプレート, 熊本市現代美術館蔵

ミロヴァン・マルコヴィッチのHP
http://markovic.org



「第５回　ECO展（絵個展）－森－」

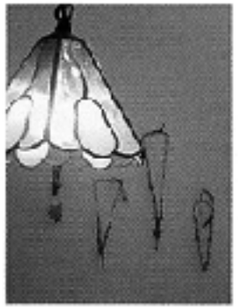
2006.8.1－8.6　熊本県立美術館分館［展示室１］　熊本市千葉城町2-18　TEL351－5411

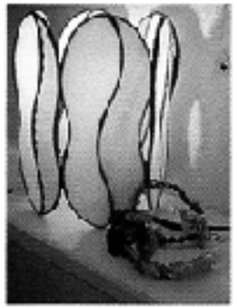
印刷会社である(有)サンカラーのデザインチーム7名による手作りパフォーマンスの展覧会。企業理念は「無駄を無くす」という事で、クオリティを向上させることが無駄な印刷物を無くし環境の保護にも繋がるのではないかというお話を頂いた。展示室に入ると、鳥の囀りや水の音と共に折り紙で作ったしずくと切り絵の動物たちが出迎えてくれ、森の中を連想させる。メインスペースでは、森や風をイメージした色鮮やかなグラフィックアート、印刷を用い木漏れ日や滴り落ちを再現した立体作品、小石や木を使った体験スペース等、様々な表情の「森」を体験することが出来た。実際のデータをもとに、身近に環境問題が迫っていることを訴えかける作品もあり、展覧会を通して、自然の大切さを再認識する機会となった。会場では、出品者全員の「森」に対する思いを綴ったパンフレットを配布しており、それを片手に作品を観てまわれば、より作品を身近に感じることができるかもしれない。(N.S) (I.A) (N.I)

「chieka ＋ マスダナガコ『太陽のヒカリ展』」

2006.8.8－8.13　equipment : FLOOR　熊本市南坪井7-16-1F　TEL 323－1197

並木坂から一本脇道に入ると、路地裏にギャラリーカフェがある。こじんまりとしたくつろげる店内に足を踏み入れると、そこにはマスダナガコさんのステンドグラスの照明作品が空間を暖かく包んでその場を彩るように広がっている。背景にはその照明に照らされて輝いているビーズ等の小物を使ったアクセサリー作品群が可愛くディスプレイされ、chiekaさんの作品を、見る人が興味を持って目を留めていた。店内ではお客さん達が自分達の席を立って二人の作品を手に取って話している姿が見られた。作品の傍には作家さんが作ったキャプションが貼られていて、一つ一つメッセージが違うところも必見。より一層深く作品を楽しむことが出来るだろう。その中にはchiekaさんの言葉で「ハンドメイドの温もりやオリジナリティ溢れるアクセサリーを身につける喜びを」というメッセージも飾られている。またその作品群は店内で販売もされている。食事している席のすぐ横が作品の陳列棚なので、食事中もずっと作品に触れていられる空間だ。マスダさんのステンドグラスを通してくる柔らかな光、周りにいるchiekaさんのアクセサリー達とそこで心和ますお客さん達の笑顔が融合し、店内は別世界が広がっている。(S.T) (M.Y)





「うまれよる アートと街と」

2006.8.3－8.9　子飼商店街広場

この展覧会は、東京在住のアーティスト、石川恭子さんによる個展です。この展覧会で彼女は、熊本で見つけた素材を取り込みながら、野外インスタレーションを展開しています。商店街で借りたというテントの骨組み、トタン、レンガや木材など日常的な素材を加工、配置し、独自の空間をつくりだしています。この作品は会期中、本人の手によって毎日夕方になると撤去され、朝になると再び設置されるため、毎日少しずつ違った表情をみせます。その日の気候、あるいはその日の彼女の気分によってさまざまな変化が加えられるのです。ホワイトキューブでの展示と違って、光や風、雨などという自然現象の影響を受ける野外での展示を彼女自身楽しんでいるようでした。熊本という土地で彼女自身が感じたことの痕跡を作品から垣間見ることができるような気がします。彼女の作品は、変化することによって成り立っているので、その変化をぜひお楽しみいただきたいです。(J.O) (E.N)

アーティストの石川恭子さん

「岡林隆雄　吹きガラス展」

2006.7.30－8.12　ぐらすはうすレーマーギャラリー　熊本市大江5－17－14　TEL353－1853

高知県高知市出身の岡林隆雄さんの熊本初の吹きガラス展。店内真のレーマーギャラリーに入ると、およそ70点に及ぶ岡林さんの作品が並べられており、雰囲気を漂わせている。グラスや、皿、花入れなど、様々な形の吹きガラス作品が揃っており、私たちの心にさわやかな風を送ってくるようである。光を反射して輝く作品に、青・緑・ピンクなどのぼかしが入っており、眺めていると吸い込まれる錯覚を覚えるほど美しく感じた。作品の中には、テレビ朝日「徹子の部屋」の番組の中で、ヨン様ことペ・ヨンジュンさんが出演した際に水飲み用のグラスとして出された作品も展示してあり、ヨン様ファンには必見である。器としての機能性はもちろん、ガラス特有の流動性、そして鮮やかな色彩を持つ岡林さんの吹きガラスの世界を体感できた個展だった。(Y.M) (K.M)

「第16回コスモス油彩展」

2006.8.1－8.6　熊本県立美術館分館　熊本市千葉城町2－18　TEL351－8411

公民館を通して集まった『コスモス』というグループの17人による油彩展です。コスモスは30年近い歴史があるそうで、グループ展は今年で第16回を迎えたとのことです。講師の上村陸一先生の作品を含め、デッサン、風景画、人物画、静物画などの具象絵画を主とした約70点の作品が展示されています。県立美術館分館2階の落ち着いた静かな展示室内にうまく溶け合うように、個性豊かな大小さまざまな作品が並んでいました。モデルを前に描いたり、遠くまで実際に足を運んで描いたりと、精力的に制作に励まれています。特に出品作品に多く見られる廃校を描いた作品は、コスモスの皆さんが何度まで行って描いてきたものたそうです。コスモスの皆さんは一人一人が向上心に満ちていて、あたたかい人柄の溢れる作品たちに、エネルギーをもらえる油彩展でした。(T.Y)(N.N)

「崇城大学芸術学部　美術学科学生作品選抜展06」

2006.7.4－9.30　崇城大学ギャラリー　熊本市花畑町10－25　TEL323-1158

崇城大学芸術学部の生徒の作品展。前年度の卒業制作展の選抜されたもの。白とグレー基調の館内スペースに日本画、洋画、彫刻が展示してある。入ってすぐにテラコッタ粘土による象、隣には人形、棒の馬が観覧者を迎える。日本画では急な坂道を一生懸命マウンテンバイクで登る様子を描いた緒方亮輔さんの「坂道」、工場の冷たい眼の煙突や機械に、アクセントとして赤のラインを加えた近藤知展さんの「工場」などがある。中でも淡い色調で描かれた徳留多子さんの「坂道」は4メートルをこえる大作である。洋画では川沿いの民家をよく描写した上野洋嗣さんの「川辺の風景」や、変型の「shower」などは独特な雰囲気をかもし出している。このように全体的にゆったりとしたスペースに15作品が展示されている。
崇城大学ギャラリーは電車通りと銀座通りの交差点に位置しており、また展覧会自体は作品一つ一つに生徒達が四年間やってきたものがそれぞれにつまっていて一作品につきしっと見ていられる。是非若き学生たちのエネルギーの詰まった作品たちを見てほしい。(Y.M)(S.B)

●実習生執筆者一覧

*絵画部、30音順
*ギャラリー・各作家の文末にイニシャルにて記載。

足達　賀(T.A)
岡田　朝子(H.O)
加不　夏子(N.S)
田上京津美(N.T)
寺尾　幸(S.T)
西原　紀子(N.N)
野田　敬彦(E.N)
馬場　祥子(S.B)
松富　真治(K.M)
迫間　浩二(Y.M)
本山　浩志(Y.M)
山口　真子(M.Y)
矢村　ムー(T.Y)

アート・キャンプ ▶▶▶ 2006.7.29-30

クォークラリー

野外収穫

いただきます

カレーライス

ナイトハイク　こわいかも…?!

花火

木のペンダント作り　うまくできるかな?

ペンダントのプレゼント交換

実習生たちのフォトダイアリー ▶▶▶▶ photo diary

2006.8.5 ▶ 「美術館のアートワークをつかって、ワークショップを考えよう!」

草間彌生(年寄の目)を用いたワークショップ

紙でつくったボックスで無限の世界を様々な角度から観察するワークでした

ジェームズ・タレルMilk Run Sky 2002を使ったギャラリートークの様子

参加者には「光」を体験してもらいました

非常通(少年と金魚)を使ったワークショップ

参加者に感覚してもらったり、女性をたよりに絵を描いてもらいました

平成18年度学芸員実習スケジュール（12日間、うち2日休み）

今年の課題 当館フリーゾーンの作品を1点選び、作品理解を促すワークショップなどを企画せよ。
最終日前日に、グループごとに発表を行うものとする。

7月26日(水)	9:50-10:00	集合・レジュメ配布
	10:00-10:50	諸注意/説教・学芸法規/自己紹介
	11:00-11:50	美術館内(全体)案内
	13:00-13:50	館長挨拶
	14:00-14:50	CAMKのこれまでの活動
	15:00-15:50	企画展見学／生人形展ギャラリートーク
	16:00-16:50	美術館のマネージメントについて
	17:00-17:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
7月27日(木)	10:00-12:00	課題研究
	13:00-15:00	CAMKのコレクションについて 作品調査・ディスクリプションをしてみよう
	15:00-17:00	課題研究
	17:00-17:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
7月28日(金)	13:30-14:20	ボランティア(CAMKEES)について
	14:30-15:20	教育活動とワークショップについて
	15:30-20:00	課題研究
	(途中1h休憩)	フライデージャム見学、および準備・片付け
	20:00-20:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
7月29日(土)		金峰山にてアートキャンプ
7月30日(日)		金峰山にてアートキャンプ
7月31日(月)		休日
8月1日(火)		休日
8月2日(水)	10:00-10:50	英文書類調査
	11:00-11:50	ホームギャラリーと美術図書について 図書整理

＊平成19年度学芸員実習への申し込みなどの詳細は当館HPをご参照下さい。

8月2日(水)	13:00-15:00	金峰の影響について・監視員体験
		(Aグループ)監視員体験
		(Bグループ)美術図書整理
		(Aグループ)美術図書整理
		(Bグループ)監視員体験
	15:00-17:00	課題研究(＋コーヒーブレイク)
	17:00-17:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
8月3日(木)	13:00現地集合	課題研究
		南海毒蛾国際画廊クラブ訪問
		帰国後、感想文作成
	16:30-17:00	AKLについて
		日誌作成・明日のスケジュール確認
8月4日(金)	10:00-12:00	AKLギャラリー取材
	13:00-14:00	AKLギャラリー取材
	14:00-16:00	AKL転事、課題研究
	16:00-17:00	課題研究(最終チェック)
	17:00-17:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
8月5日(土)	10:00-10:50	課題発表①
	11:00-12:00	課題発表②
	13:00-13:50	GC真珠子展準備など
	14:00-15:00	真珠子トーク＆ワークショップ見学
	16:10-17:00	課題発表③
	17:00-17:30	日誌作成・明日のスケジュール確認
8月6日(日)	10:00-10:50	課題及び実習反省会
	11:00-11:50	おわりに：館長講話
	12:00-12:30	日誌作成・閉会

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ
アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇生人形と江戸の欲望展アンケートより

・ポスターではなまなましくてどうかと思いましたが、見に来てとてもよかったです。目前で見れるようにしてあり、ぐるりと見れて感動しました。熊本出身の方の作品がと思うといっそう身近さを感じます。今までの展示で一番よかったです。(59歳・女性・熊本市内)

・松本喜三郎の〈聞慶皆書清隆像〉と〈谷忠親像〉を最初に見たのが初めてで、その御前回の生人形展に来ました。今回の相談の生人形は、また本当に迫力があり、びっくりしました。(59歳・女性・長崎県)

・生人形、とおってもよかった。もっともっとたくさん人形をみたかった。看板の中に書き込まれているセリフがリアルでとても良かった。思わず笑ってしまいました。(43歳・男性・熊本県)

・いままで日本の文化に対しては、あまり興味がありませんでしたが、とてもおもしろく拝見させていただきました。(23歳・男性・福岡県)

・トークショーを拝見してからの観覧だったので、細かいところまで見ることができ、大変面白かったです。(21歳・女性・福岡県)

・とっても楽しめました。こんな貴重なものが日本になくて海外で大切にされていたなんて！「血赤り」の人形に特に見とれてしまいました。学芸員中の作品と小さな動物の人形もgood！でした。(52歳・女性・北海道)

・すごい物がたくさんおいてありすごかった。説明がくわしくしてありよかった。(11歳・女性・熊本市内)

・他の展示とはとどろきを感じる。キャッとしている。満足。(50歳・男性・熊本県)

・すもうと歌舞伎(切り首)のふたつに力点を置いた点がよかった。(81歳・男性・熊本市内)

・とても見やすく照明の位置もよく考えられていて作品のすばらしさが伝わりました。広いスペースでの展示だったのでゆったりとまわれ、とても良かったです。(49歳・女性・熊本県)

お知らせ

AKL28号、「レターフロムアーティスト」に紹介した新収作品の〈Happy End (Moscow)〉は、平成14年度購入作品です。作品説明下のキャプションが誤りです。ここに記して訂正いたします。

10月12日は当館の開館記念日です！企画展もふくめ学芸員入場無料ですので、ぜひご来館ください。なお当日はCAMKインターンシップ・アドバイザー、ハイディ・ベネガスさん（プエルトリコ芸術大学教授）の講演会が14時よりホームギャラリーで開催されます。

■熊本アートパレード作品受付日せまる

作品受付日は10月28・29日です。審査員はアラーキーこと荒木経惟（あらき・のぶよし）さん。今年のテーマは「優しさ」です。詳細は美術館で配布中の応募要綱をご覧下さい。

■グループ・ツアーのお知らせ

10名以上のグループで観賞の場合、学芸員による企画展の解説案内をいたします。展覧会チケットが必要です。お早めに電話で日時をご相談のうえ、お申し込みください。　ご予約電話番号：096-278　7503 7504

■展覧会カタログ・ポスター等は通信販売が可能です

G8で開催中の「真珠子展」のカタログは、好評発売中です。展示作品（ドローイング）のポストカード10枚と、アーティスト真珠子とキュレーター金澤韻（川崎市市民ミュージアム学芸員）との対談インタビューを収めたリーフレットが、素敵なボックスにセットになっています。定価600円、通信販売可（送料別、現金書留での前払）。

アートキッスレターの主な設置場所の紹介／熊本市内ギャラリー、熊本県立美術館（本館・分館）、熊本県立劇場・工芸館、市役所各総合庁舎、市民病院、植木市民センター、菊陽市民センター、西部市民センター、秋津市民センター、龍田市民センター、託麻市民センター、東部市民センター、清水市民センター、大江市民センター、若葉市民センター、北部総合支所、龍田総合支所、河内総合支所、天草総合支所、五福球技場センター、総合文化センター、青少年センター、産業文化会館、中央公民館、健軍文化ホール、国際交流会館、市民会館、熊本博物館、こども文化会館、熊本市立図書館

郵送のご案内（有料）／毎号確実に入手されたい方、遠方に居住まいの方に、ご希望に応じて直接送付いたします。郵送料は各号1部につき90円（郵便振替を希望される場合は540円）、切手にてご送付ください。各号とも発行直後にお送いたします。振替郵送の送付を希望される場合は、お問い合わせ下さい。

当館の企画展ポスターを貼ってくださる場所、チラシを置いてくださる場所を募集しています。お問い合わせ先：096-278-7500

編集後記

学芸員実習生号は、「Art de Gyan」のコーナーにおいて、実習生みんたちが熊本市内のギャラリー取材に行き、執筆を行うのが特徴です。実際に作品をみた後に、その印象を言葉にまとめるのにとまどい長時間悩みながらも、頑張って書き上げていました。取材の様子が、とてもうまく表現できていればおもいましたが、いかがでしょうか？　美術館での実習として、様々なことに挑戦しながら過ず12日間の体験が、彼らが将来進む方向を考えるにあたって多少なりとも役に立つようなら、単純館という場所の存在意義のひとつでも果たしたことになるのかな、などと考えております。

さて、美術館は千客万来の日々が続いております。今年でよりあげた公式来館者だけでも、アーティストの森村泰昌さん（新作がすごかったです！）、マンガ研究家の伊藤剛さん（ミネラルにも詳しい）、北九州市立大学助教授の宮本大人さん（可愛ふるれる話ぶり）、アーティストの真珠子さん（ご本人もファッションは抜に可愛い）、また、生人形展を目的として、県外者の方々もたくさんご来館されました。展覧会は10月22日までです。みなさまのご来館をお待ちしております。

編集長　富澤治子

●執筆者一覧
＊ギャラリー取材執筆者のスペルはイニシャルにて記載しております。

富澤治子
Haruko Tenisawa（熊本市現代美術館学芸員）
成水朋子
Akiko Sakamoto（熊本市現代美術館学芸員）
竹田　茜
Akane Takeda（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
伊藤剛々
Nana Itoh（熊本市現代美術館学芸アシスタント）
久加郁　晃
Saki Yakase（熊本市現代美術館学芸アシスタント）

兼城圓山　Syozan Kaneshiro（浄瑠璃）
森山浜草　Tanco Moriyama（浄瑠璃）

本田真理子
Yoshiko Honda（熊本市現代美術館主任学芸員）
戸田江美
Emi Toda（熊本市現代美術館学芸員）

●発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.20
2006年9月発行（学芸員実習生特別号）　◎無料◎
●編集人／南島　宏　編集長／富澤　治子　●活版／コロニー印刷
●デザイン／（有）松永　社デザイン事務所
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7692